

語)で、医学書の執筆を行ない、これは町の外科医に歓迎されたが、日本にも受容された。一九世紀後半の、ウトレヒト陸軍軍医学校からの強い影響については、既に発表された(拙著『江戸のオランダ医』、『蘭学の背景』)。

従って、日本の受容した蘭医学は、オランダの外科医界の医学が、その主体をなすと結論づけられよう。

従来、日本で紹介された西洋医学の歴史書は、大学卒の内科医(MD)の歴史であり、発明・発見を中心とした内医学史(学説史)である。ギルド外科医たちは、そうした医史学書には、めったに顔を出さない。彼等は大衆の医療を受持った職人であり、こうした医療職の歴史を研究するには、外医学史的、社会史的研究方法をとる必要がある。そして江戸の日本は、オランダ外科医界の医学を受容した。それは、形而上性の強い内科医界の医学とは、異質なものであった。

1) (三菱水島病院)

2) (ライデン大学医史学)

シドニ・リンガーと治療学

栗本宗治

リンガー(ロンドン)の『治療学ハンドブック』は当時のベストセラーであった。手許の一二版(一八九〇)について考察する。

オピウムに関してハンドブックはいう「A・ウッドによる皮下注射は今や痛みをやわらげ、眠りを催し、スパズムを抑えるなどのために広く行われ、経口与薬よりもすぐれている。その作用はより速やかで、効果は確実であって、食欲を害したり、便秘をきたしたりすることはない……」。「オピウムないしそのアルカロイドは胃の痛みをやわらげる。胃癌や消化性潰瘍に、飲酒による慢性胃炎に有効である。……しばしば急性および慢性の下痢に有用である。刺激物をだした後、結核の慢性下痢、赤痢などに有効である

……。」「シデナム門」下のトマス・ドーバーの「ドーフル散」

(一七三二)、現代のブロンプトン・カクテルにつながる。

ウッドのモルヒネ皮下注射はそもそも吸入麻酔の未熟を補うか、とつてかわるべく開発されたがコカインの局所作用発見をまっけて、その意企は全うされた。

エーテルについてページ、クロロホルムについて九ページ、「エーテルの生理と治療はクロロホルム同様に理解。クロロホルム、アルコールのようにならず大脳皮質、ついで脊髄、そして心・血管中枢を抑制する」。クロロホルムの血液への拡散は速やかで、腸へは遅い。クロロバーによると無感覚をきたすミニマム量は四〜五%、この濃度吸入五分で無感覚がえられる。クロバーはふつう、はじめに二%与え、五%にふやすという。呼吸が弱くなったり、とまったときには人工呼吸(シルベスタ法)を行うこと。メデイカル・アンド・サージカル・ソサイアティ(今日のロイヤル・ソサイアティ・オブ・メデイシン)のクロロホルム委員会は電流による蘇生よりも人工呼吸優先の見解。すでにスノーはエーテル麻酔の吸入濃度を一定とすること、経時的にみとめられる五段階抑制を記載した(一八四七)、

薬理カイネティックのはじめである。

臨床医リンガーにつながるトマス・ルイスは心電図を活用、今日の心臓病学の先駆となった、クロロホルム心停止メカニズムは解明された。

生理学会の夕、リンガー座長による入会紹介を受けたベイルスとスターリングによって、リンガーの基礎的関心は進展された。リンガーのカエル心実験は神経・体液遊離臓器についての臓器固有機能の分析、灌流液即ちリンゲル液(日局)は、人工細胞外液であることの二点が注目される。

後者は日常の輸液に、前者は心移植にすらつながらる。心ポンプの固有機能はスターリングの犬心肺標本によってさらに分析された。その肺の実験用人工呼吸器はスターリング・ポンプとして市販された。第二次大戦後北欧をおそったポリオ流行(球麻痺)は気管挿管(第一次大戦時の手技)プラス用人工呼吸(間歇陽圧)によって死亡は激減した。スターリング・ポンプはここで今日のベンチレータになった。

一九五・六〇年代アメリカ循環器病医サーノフらの問題提起、ベッドサイドでの心機能評価には何を基礎とすべき

か——スターリング・ロー。これを臨床用にモディファイしたのが心室機能曲線であり、スワン・カテーテル（一九七五）はベッドサイドでこのカーブをプロットする。（なお肺動脈圧カテーテルの開発には、戦中米国フェン（ベイルス・スターリング門下）やクルナンらによる肺研究からの流れがあった。）

（大阪医科大学）

ヘルマン・ブシヨフの生涯とその業績

ヴォルフガング・ミヒェル

ヨーロッパで最初に東洋医学の灸を詳細に描写した、
バタヴィアに住み、牧師をしていたヘルマン・ブシヨフ
Hermann Buschhof についてはこれまでのところあまり知られていない。まず、その生涯を簡単に紹介したいと思う。

一六二〇年？ ヘルマン・ブシヨフ、ユトレヒトに生まれる。

？年 ユトレヒト、またはライデンにて修学。

一六四二年 Zoelen で牧師候補 (PropONENT) になる。

一六五四年十月五日 VOC の牧師として東インド行きを希望する。

一六五四年十二月十日 De Phoenix 号で出港。